



親密性・親密圏をめぐる定義の検討：無定義用語としての親密性・親密圏の可能性

桶川, 泰

(Citation)

鶴山論叢, 11:23*-34*

(Issue Date)

2011-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002809>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002809>



親密性・親密圏をめぐる定義の検討

—無定義用語としての親密性・親密圏の可能性—

Examination of Definition of “Intimacy”・“Intimate Sphere”

桶川 泰

Okegawa Yasushi

【要旨】

今日、親密性・親密圏という用語に様々な定義が試みられているが、本稿では、親密性・親密圏の定義を考案する前に、「なぜ親密性・親密圏という用語に定義が必要とされるのか」「定義をしなければ議論上の不都合が如何なる形で存在するようになるのか」「親密性・親密圏をめぐる議論は如何なる議論が展開されているのか」を検討した。

その結果、親密性・親密圏に対して「親しく交際している状態」以上の意味づけが与えられる背後には、「生の拠り所」への期待、近代家族からの解放・自由のためのオルタナティブとしての新たな関係性への期待や「私的領域の民主化」への期待、などの規範的な要請が存在していた。

そうした点で、本稿は、現代における「親密性・親密圏の変容」を観察し、記述・説明していこうとする場合には、親密性・親密圏を無定義用語として採用した方が有用と考えられることもあることを指摘した。

親密性・親密圏の定義に拘りすぎると、人びとの親密性をめぐる意味づけのあり方—如何なる関係性を「親密な関係性」と見なしているのか、如何なる事柄を「親密さの証」としているのか等—を明らかにしていくことができないからである。

また、本稿では、親密性・親密圏を実体的に捉え何らかの定義を与えるにしろ、親密性・親密圏を無定義用語として採用するにしろ、現代日本社会における親密性・親密圏の変容を観察・記述・説明していくには、アンソニー・ギデンズが提示した埋め込み・脱埋め込み、再帰性、「純粋な関係性」などの諸概念が有用であることも指摘した。

【キーワード】

親密性・親密圏、アンソニー・ギデンズ、齋藤純一

1. 親密性・親密圏をめぐる定義の問題

今日、親密性・親密圏という用語に様々な定義が試みられている。

例えば、筒井淳也は親密性を「複数の人間が互いの情報を共有しあっており、かつ一定の相互行為の蓄積がある状態」と定義し、「情報の共有」と「相互行為の蓄積」に特徴があること（筒井 2008：11）を指摘している。天田城介は「特定の他者との関係性、あるいはそのような他者との『近接性』、関係の密度を選択的に強化させ、増大させる様態」（葛山 1999）という葛山の定義を引用し、「他者に対する社会的・心理的な距離の近さ」を意味する多義的な概念であると紹介している（天田 2007：312-3）。

一方、市野川容孝や齋藤純一は、親密性・親密圏という用語に対して、より複雑な定義を下しており、市野川は、親密な関係性を「ある人が特定の人に対して向ける特別な感情と、この感情を基盤とした特殊な人間関係である」（市野川 2007：xi）と定義し、固有名をもつ人々の（一方通行的でない）関係性である点に注意を呼びかけている。齋藤においては、親密圏を「具体的な他者の生／生命——とくにその不安や困難——に対する関心／配慮を媒体とする、ある程度持続的な関係性を指すもの」（齋藤 2003：213）と定義しており、多くの研究者に引用され、受け入れられている定義になっている。

ところで、親密性・親密圏という用語は、なぜ定義が必要なのだろうか。

岩波書店の『広辞苑』（第6版）を引くと、親密とは「相互の交際の深いこと」「したしくつき合っていること」と記述されている。同様に、三省堂の『大辞林』（第3版）では、親密とは「親しく交際していること」「仲のよいこと。また、そのさま」と記述されている。また『三省堂類語新辞典』では、類語として、「仲良くする」「和する」「親しむ」「慣れ親しむ」などが挙げられている。

親密性（intimacy）という用語は、「親しく交際している状態」であり、親密な関係（intimate relationship）とは「親しく交際している間柄」、親密圏（intimate sphere）は「親しく交際している人々によって成り立つ空間」のことを指しており¹⁾、特に詳しい説明を必要としない（定義を必要としない）という感がある。

定義とは、ある概念の内容や言葉の意味を他の概念や言葉と区別できるように明確に限定することであり、そうした用語の意味や用法を限定することで、共通の認識を作り出し、議論をより円滑（もしくは緻密）に進めて行くことができるようにするための作業である。

逆に言えば、親密性・親密圏をめぐる議論を行おうとする場合、親密性という

用語に対して「親しく交際している状態」以上の意味の限定を行わなければ、議論を円滑に進めて行くことができない、ということを示している。

本稿では、親密性・親密圏の定義を考案する前に、「なぜ親密性・親密圏という用語に定義が必要とされるのか」「定義をしなければ議論上の不都合が如何なる形で存在するようになるのか」「親密性・親密圏をめぐる議論は如何なる議論が展開されているのか」を考察する。

また、親密性・親密圏の定義に拘りすぎることによるデメリットと無定義用語としての親密性・親密圏の可能性についても触れていきたい。

2. アンソニー・ギデンズの議論における親密性

親密性・親密圏に関しては、ハンナ・アーレント、ユルゲン・ハーバーマス²⁾、アルフレッド・シュッツ³⁾など、多くの社会学者が言及しているが、「親密性の変容」について正面から議論を展開し、親密性という用語を社会学研究に普及させてきたのはアンソニー・ギデンズだろう。

そのため、まずギデンズの議論において、親密な関係は如何なる関係性と想定されているのか、既存の関係とは如何なる点で異なる関係性としているのかを考察しておきたい。

ギデンズの議論では、ゲマインシャフト ゲゼルシャフトという社会学的理論枠組みでは描ききることができない後期近代社会における人間関係を、「親密性の変容」という観点から描いている (Giddens 1990=1993)。

ギデンズによれば、伝統的な社会では部内者と部外者の明確な境界線が引かれており、友人関係は血盟の兄弟や戦友といった同士愛的な形態を取っていたし、基本的信頼は、共同体や親族関係、制度化された友人関係の中に組み込まれていた。

しかし、商品化された市場を含む近代的な抽象システムの大規模な拡大によって、部内者と部外者の境界線は崩壊していき、個々人は「見知らぬ他人」に囲まれて暮らすようになる⁴⁾ (Giddens 1990=1993)。

そうした「見知らぬ他人」に囲まれて暮らすようになる社会は、必ずしも非人格的な世界ではなく、以前には面識のなかった相手や遠距離にいる相手とも人格的絆を形成して行くことが可能であり、時空間の巨大な広がりの中で関係を営んで行くことができる社会である。言うならば、友人関係を形成すること自体が、関係性が脱埋め込み化されていく（緊密な関係性が崩壊する）中での、関係の再

埋め込みになる（Giddens 1990=1993）。

また、抽象システムが拡大し、関係性の脱埋め込み化が進行する社会においては、関係性を支える質も変容していく。伝統的な社会では、友人関係を支えるものは、名誉や忠誠心であったが、近代社会（特に後期近代社会）では、親愛感情や思いやりなどの「親密さ」が重要性を持ってくるようになる。もちろん、近代以前の同士の愛的な関係性や共同体的な関係性にも情緒的な親密さはともなっていたが、近代社会では親密さが人格的な信頼を維持するための条件になっていき、信頼を得て行くために、『相手に心を開くこと』が要請されていくようになる（Giddens 1990=1993）。

このように、伝統社会から近代社会へと移行することで、人間関係が如何に変容しているのかを親密性という概念を持ちながら説明する点にギデンズの問題関心が存在しており、『近代とはいかなる時代か？』（Giddens 1990=1993）においては、特にその傾向が強い。一方、『モダニティと自己アイデンティティ』（Giddens 1991=2005）では、関係性の脱埋め込み化と再帰性の増大という観点から、現代における親密な関係性の諸特徴や親密な関係性の中でも互いのコミュニケーションによって営まれる「純粋な関係性」の特徴を考察している⁵⁾。

それに加え、『親密性の変容』（Giddens 1992=1995）では、現代の親密な関係性の変容による「私的領域の民主化」の可能性もまた検討している。

ギデンズによれば、親密な関係性を対等な人間同士の人格的交流と見なすのであれば、「公的領域における民主制と完全に依存できるかたちでの対人関係の掛け値無しの民主化という意味合いをとまう」し、そうした関係性の確立が「近代の諸制度全体を崩壊させるような影響力をもまた、おそらくもちうる」（Giddens 1992=1995：14）ことを指摘している。

そして、「民主的な関係性」とは如何なる関係性なのかを探っていくために、心理療法の研究書や自助精神療法のマニュアルを検討している。特に共依存症、もしくは嗜癖の関係性と親密な関係性のそれぞれの特徴を比較していくことで、解放の現実的イメージを探っている。例えば、嗜癖関係に陥らず、親密な関係性を築いていくためには個人的境界を持ち、相手に心を開いていく必要があり、さらには相手に心を開き、気持ちの通じ合いを図っていくには、神経の細やかさや臨機応変の才が必要なこと（Giddens 1992=1995：142）を指摘している。

また、「民主的な関係性」を築いていくには、自己の自立が必要であり、「自己の自立は、民主的秩序に固有な他者の有す能力や才能に例の敬意を払うことを可能」にし、「他者をやはり自分と同じ自立した個人と見なし、その人たちのそれ

ぞれ別個な潜在能力の発達を脅威とは受け止めないようになることができる」(Giddens 1992=1995:278)ことを論じている。他にも、親密な関係性の変容の中で、男性の衝動強迫性が強まっており、民主的な関係性を築くためには、男性が新しいパーソナリティを獲得していくことを課題として挙げている。

以上のように、親密な関係性という観点からゲマインシャフト ゲゼルシャフトでは描くことができない人間関係を描く一方で、「私的領域の民主化」の可能性をもがギデンズの議論において検討されている。そうした点では、親密性は「親しく交際している状態」以上の特別な意味合いを内包している。

3. 脱近代家族としての親密圏と「生の拠り所」としての親密圏

もっとも、親密性に「親しく交際している状態」という以上の意味が込められる背後には、近代家族の問題も存在している。

近代において家族は、情緒的絆が取り結ばれる愛の共同体としてイメージされていたが、フェミニズム研究や近代家族研究では、家族が「男性は生産、女性は再生産」を課すための装置として機能しており、個々の人々の自発的な感情が抑圧されてきたことを論じている。

例えば、山田昌弘は、近代家族が「家族ならば愛情があって当然である」などの種々の愛情イデオロギー（感情規則）によって成立していることを指摘し、近代化は「家族における『感情の解放』を導いたのではなく、感情を解放したように見せかけながら、家族の感情に関する規範やイデオロギーによって感情に対する規制を強めたのではないだろうか」（山田 1994:103）という問題提起を提示している。

上野千鶴子は、「私領域が公領域のなくてはならない、だが見えない半身として作りだされた時、それは競争と効率のストレスの多い公領域からの避難所、愛と慰めの聖域として作りだされた」（上野 1994:77）ことを指摘している。また、私領域としての家庭が、男にとってはストレスの多い公領域から避難所であっても、女にとっては、愛と慰めを供給するための職場の一種にすぎないことも指摘している（上野 1994:77）。

このように、愛の共同体とされていた近代家族が、抑圧的な空間であることが指摘されていくことで、親密性・親密圏という用語に、「近代家族からの解放・自由のためのオルタナティブとしての新たな関係性への期待」（井上 2004:241）が持たれるようになる。

また、「親密さをもたらず関係とは如何なる関係性なのか」が問われるようになり、「家族は『愛の共同体』と等位置で語られるが、親密圏での人々の紐帯は愛だけでない。血縁や同居、家計の共有などの家族という形態に還元されない関係性——同性愛の家族、単身の家族、グループ・ホームやセルフヘルプ・グループなど——の形において捉えられる」（金井 2003：32）ことが強調されていく。これまでの不在化された女性の経験を語る／聴くことの回路を通して、「公共性には還元し得ないまた近代家族にも回収し得ない親密圏のイメージと定義をどう獲得するか」（金井 2003：33）といった問題設定も生まれていく。

1 節で紹介した齋藤の「具体的な他者の生／生命——とくにその不安や困難——に対する関心／配慮を媒体とする、ある程度持続的な関係性を指すもの」という定義は、多くの研究者に引用されているが、「親密圏＝近代家族」の脱政治化を図る試みを持ってたされている。また親密性に「親しく交際している状態」という以上の意味が込められる背後には、近代家族の問題が存在していることは前述したが、齋藤の親密圏は、「生の拠り所」として提示されている点にも特徴がある。

よく知られているように、アーレントは経済原則に冒された「社会」領域による画一化からの圧力から逃れるために「親密さ」が発見されたことを指摘していた。ただ、アーレント自身は、親密圏が「現われの空間」としての公共圏の代わりにならないとして、消極的な評価しか与えていない（Arendt 1958=1994）。

それに対して、齋藤は「生を承認・肯定する空間」として親密圏に積極的な評価を与え、「親密圏の翳った光が完全な暗黒——社会的な黙殺や歴史的な忘却——を妨げる条件となることがあるのである」（齋藤 2003：219）点や「正常・正当なものとして社会的に承認されていない生のあり方や生の経験が肯定される余地をつくりだす」（齋藤 2003：219）点を強調している。

現代社会では、ある人々の存在そのものを取り除くことによって問題の解決をはかろうとする「場所の剥奪」の増大によって、生存を脅かす境遇が急速に広がっており、齋藤は生を肯定・承認する場として親密圏に多くの期待を寄せている。

また、親密圏をアソシエーションやコミュニタリアンが提示する共同体とは異なる点も強調している。まず、アソシエーションが対等な関係性によって形成されているのに対して、親密圏が非対象的な相互作用も存在しており、ルール支配に先立つ意見のやりとりや感情の呼応によってしだいに形成されるものである（齋藤 2003：229）ことを指摘している。

コミュニタリアンが描く共同体と親密圏の違いとしては、共同体が共通善を実

現し、価値において等質な集団を指しているとすれば、親密圏には「われわれ」として括ることができるような求心性や等質性は見いだしがたい（齋藤 2003：230）。そして、さらに「親密圏が新たにつくりだされ、互いの経験が照らし合わされるなかで、『共通の経験』や『共通の価値』とでも言うべきものが形成されるとしても、それらは互いの違いをそこに還元しうる何か（共通善）ではない」（齋藤 2003：230）ことを提示している。

4. ギデンズと齋藤の親密性・親密圏概念

2節・3節で、ギデンズにおける親密性概念と齋藤の親密性概念を紹介した。

まず、齋藤の議論では、「生の拠り所」として親密圏を提示しており、「具体的な他者の生／生命——とくにその不安や困難——に対する関心／配慮を媒体とする、ある程度持続的な関係性を指すもの」という定義がなされていた。親密圏が「親しく交際している人々によって成り立つ空間」以上の意味の限定を行っていないかなければならない合理的理由が存在していると言っていいたい。

もっとも、こうした齋藤の親密圏概念は、現代における「場所の剥奪」の増大の中で、如何に「生の拠り所」となる場を見出すのか、如何に男女の性愛によって形成・維持される私的な小家族と距離を取って提示するのか、という規範的な問題関心の下で提示された概念である。

一方、ギデンズの議論では、「親密性の変容」という観点から、近代社会では人間関係が非人格的なものへと移り変わって行くのではなく、「相手に心を開く」ことや「気持ちの通じ合い」が重要性をもつ社会へと変容していくことを指摘しているが、親密性に関して明確な定義をしているわけではない。

むしろ近代社会（特に後期近代社会）では、（名誉や忠誠心に変わり）親密さが人格的な信頼の条件になってくるが、そうした親密さが関係の形成に重要性を持ってくる関係性とは如何なる関係性なのかを明らかにしていくこと自体が、ギデンズの問題関心の1つとして存在していることを窺うことができる。

ただ、『私的領域での民主化』は如何にすれば可能か」という点も、ギデンズの問題関心の1つとして存在しており、親密な関係の進展にその期待を寄せている。そうした点では、ギデンズの議論において、親密な関係性とは、「対等な人間どうしによる人格的きずなの交流」（Giddens 1992=1995：14）であり、率直な意思疎通を行っていくことができる関係性であることを想定している。

ギデンズは、「親密性」という概念を用いることで、近代社会における人間関

係の変容を記述・説明する一方で、「親密な関係性とは、相互行為の記述方法としてではなく、人びととの実際の行動が取り組むべき課題を規定していく一群の特権や責任として理解すべきなのである」(Giddens 1992=1995:280)と述べているように、規範的な概念としても使用している。

齋藤もギデンズも、親密性・親密圏に対して「親しく交際している状態」「親しく交際している人々によって成り立つ空間」以上の意味づけを与えているが、その理由として、親密性・親密圏を規範的な概念として用いている側面がある点に注意が必要である。

本稿では、現代における「親密性の変容」を観察し、記述・説明していこうとする場合、特に人々が如何なる意味世界を持っているのか、という点からしていこうとする場合には、親密性・親密圏を無定義用語として採用した方が有用なことも考えられることを指摘したい。

というのも、親密・親密圏の定義に拘りすぎると、人びとの親密性をめぐる意味づけのあり方—如何なる関係性を「親密な関係」と見なしているのか、如何なる事柄を「親密さの証」としているのか等—を明らかにしていくことができないからである。

5. 現代日本社会における親密性の変容

前節では、ギデンズと齋藤の親密性をめぐる議論を考察したが、現代日本社会における親密性・親密圏の変容を記述・説明した研究には如何なるものがあるだろうか。ここでは、土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える』(土井 2004)と浅野智彦「親密性の新しい形へ」(浅野 1999)に触れておきたい。

まず浅野の研究では、旧来の親密な関係性が、「内面」の「深み」に秘められた「本当の自分」を中心に置いてこれをどの程度共有できるか、その程度によって「深いつきあい」か、「浅いつきあい」かが判断されていたことを指摘している。だが、現代のように、自己の多元化が進行した社会では、一貫した自己同一性が必要とされなくなり、それによって、親密さにおける〈深い／浅い〉という「奥行き」自体が成立しなくなる。また、生活の文脈を限定的・選択的にのみ共有する〈選択的コミットメント〉とでも呼ぶべき親密性が登場し、関係をつくっていく過程それ自体を楽しもうとする、コンサマトリー(即時充足的)な志向性を持つてくるようになることを論じている(浅野 1999)。

こうした浅野の議論では、親密性・親密圏という用語に対して明確な定義はなされていないが、どのような関係性が深い「親密な関係」とされていたのか、その基準のあり方自体の変容が明らかにされている点に特色を持っている。

一方、土井の議論では、これまでの親密な関係性が、お互いの対立や葛藤を経験しながらも、訣別と和解をなんども繰り返すなかで、だんだんと揺るぎない関係を創りあげていくものだったのに対して、今日では、親密な関係性は、決して気の許せるものでなく、自分の率直な想いを抑え込み、過剰なほどの優しさを示しながら、相手が傷つかないように細かい気配りをしていかなければならないものになっていることを指摘している。

そうした親密圏の変容には「個性に対する欲望の無限肥大」があり、今日の若者の過剰な優しさは、他者への配慮ではなく、強力な自己承認が欲しいという自己への配慮の産物であり、友だちを気遣っているようでいて、実は自分自身を気遣っていると述べている。

また、価値観や欲求のありようがいまほど多義的でなかった時代には、お互いにコミュニケーションを交わすための繊細な能力を必要とせず、安定した構造に埋め込まれたまま、それぞれの役割を淡々とこなしていればよかったのに対して、現代ではかつてよりも高度なコミュニケーション能力が必要とされるようになってきたことを論じている（土井 2004）。

土井の議論においても、親密性・親密圏をめぐる明確な定義はなされておらず、「親しい人々の間でなされる相互作用」という程度の意味に止まっている。また、土井の「若者の親密圏が『人間関係への過剰な配慮と強迫的な不安』に悩まされている」という議論に対して、「一面的すぎるのではないのか」という批判も提示されている⁶⁾。

ただ、現代の若者の親密な関係のあり方が、「分かり合う」関係性から「過剰な優しさ」によって疲弊していく関係性へと変容しているという記述・説明は、齋藤が提示したような規範的な親密圏概念では、そもそもすることができない。

というのも、齋藤の「具体的な他者の生／生命——とくにその不安や困難——に対する関心／配慮を媒体とする、ある程度持続的な関係性を指すもの」という親密圏定義では、他者への配慮というよりも自己への配慮の産物によって、過剰な優しさを見せる関係性は親密圏として定義されないし、そもそも「何をもって他者の生／生命を配慮していると言えるのか」という疑問も存在している。

6. さいごに

本稿では、「なぜ親密性という用語に定義が必要とされるのか」「なぜ、親密性という用語に対して『親しく交際している状態』以上の意味の限定を行う必要があるのか」を検討してきた。

検討の結果、親密性・親密圏には、「生の拠り所」への期待、近代家族からの解放・自由のためのオルタナティブとしての新たな関係性への期待や「私的領域の民主化」への期待、などの規範的な要請が存在していた。

そこで本稿では、現代における「親密性・親密圏の変容」を観察し、記述・説明していこうとする場合、親密性・親密圏を無定義用語として採用した方が有用な場合もあることを提示した。

特に、齋藤の親密圏概念では、ボランティア・グループやセルフヘルプ・グループにまで親密圏概念が拡張されており、規範概念としては有用であっても、一般の人々（もしくは当事者までも）が親密な関係と見なしていない関係性までも「親密圏」と定義する可能性がある。そのため、「如何なる関係性が深い親密な関係性とされているのか」その変容を描いていくという作業や、親密性・親密圏をめぐる一次理論的⁷⁾な共有知識を抽出するという作業をこなしていくことは期待できない。

一方、ギデンズの親密性研究では、伝統社会から近代社会にかけて人間関係は如何に変容しているのか、という記述・説明的な議論と「私的領域の民主化」の可能性という規範的な議論が存在していた。

ギデンズの「私的領域の民主化」をめぐる規範論の有効性については、判断が難しいので本稿では触れずにおくが、「親密性の変容」をめぐる記述・説明は、ゲマインシャフト ゲゼルシャフトという社会学的理論枠組みでは描くことができなかった人間関係の変容を描いており、学ぶべき点が多い。また、ギデンズが提示した埋め込み・脱埋め込み、再帰性、「純粋な関係性」などの諸概念は、現代日本社会における「親密性の変容」を記述・説明していく際にも有用だろう。

特に、近代社会において、親密な関係性が共同的な埋め込みから解き放たれていくという指摘は、共同体的な親密性と現代的な親密性是如何に異なるのか（ギデンズが指摘したように「気持ちの通じ合い」が行われる社会へと変容しているのか）、関係性の脱埋め込み化の進行の中で「親密さの証」は如何に変容しているのか等、様々な社会学的問いを生み出していくし、親密性を研究対象とする（親密性研究を立ち上げる）理由そのものがある。

親密性・親密圏を実体的に捉え、何らかの定義を与えた上で、親密性・親密圏の変容を記述・説明していくにしろ、親密性・親密圏を無定義用語として採用したうえで、親密性・親密圏をめぐる人々の意味づけの変容のあり方を記述・説明していくにしろ、今後の親密性研究の発展には、ギデンズの親密性研究との対話をしていく必要性は存在しているだろう。

註

- 1) 親密性という用語を主に使用する論者もいれば、親密圏という用語を主に使用する論者もある。本稿では、親密性・親密圏をめぐる議論を様々に紹介しているが、各論者が使用している用語に即して、親密性・親密圏という用語を使い分けている。
- 2) ハーバーマスは、後期近代社会において、小家族的親密圏が自決的機能より消費機能の中で維持されていくようになる点を問題にしている (Habermas 1962=1994)。
- 3) 矢田部圭介は、親密性という概念がシュッツの社会理論の中核に見出せることを指摘している (矢田部 2005)。
- 4) ギデンズは、それにともない「友人」の対義語が「敵」や「よそ者」ではなく、「知り合い」や「同僚」、「誰か自分の知らない人」に変わっていくことを指摘している (Giddens 1990=1993: 148)。
- 5) 例えば、再帰的自己自覚性の高まりという観点からは、現代人の親密な関係性が、リチャード・セネットやクリストファー・ラッシュが描いているようなナルシスティックなものではないことを指摘している。また、「純粋な関係性」の特徴として、社会的・経済的生活といった外的条件にはつなぎ止められていないこと、再帰的に形成されること、パートナーが多様な可能性から自発的に選ばれること、等を挙げている (Giddens 1991=2005)。
- 6) 例えば、本田由紀は「確かに土井が指摘するような危うい側面が若者の間に存在する可能性は否定できないが、そうした病理性の程度は、『親密圏』に関するものであれ『公共圏』に関するものであれ、若者個々人によりさまざまなはずであるし、大半の若者は総じて困難な状況ではあってもそれなりにバランスをとりながら生きぬいている」(本田 2005: 133-4) と述べている。
- 7) 一次理論とは、「行為者自身が自らをとりまく世界について抱いている了解の内容」(盛山 1995: 179) のことである。

引用文献

- 天田城介 2007 『〈古い衰えゆくこと〉の社会学〔普及版〕』多賀出版。
- Arendt, Hannah 1958 *The Human Condition*, the University of Chicago Press. = 1994 志水速雄訳 『人間の条件』筑摩書房。
- 浅野智彦 1999 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星

社厚生閣。

土井隆義 2004 『個性』を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える』岩波ブックレット。

Giddens, Anthony 1990 *The Consequence of Modernity*, Polity Press. = 1993 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』而立書房。

—— 1991 *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. = 2005 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代社会における自己アイデンティティ』ハーベスト社。

—— 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love & Eroticism in Modern Society*, Polity Press. = 1995 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房。

Habermas, Jurgen 1962 [1990] *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp. = 1994 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』未来社。

本田由紀 2005 『多元化する「能力」と日本社会』NTT 出版株式会社。

井上たか子 2004 「親密圏」金井淑子編『岩波応用倫理学講義 性／愛』岩波書店。

市野川容孝 2007 「交錯する身体——親密性を問いなおす」鷲田清一・荻野美穂他編『身体をめぐるレッスン4——交錯する身体 Intimacy』岩波書店。

葛山泰央 1999 「親密性の創出——18・19世紀フランスにおける自伝行為の社会性」『年報社会学論集』第12号。

金井淑子 2003 「親密圏とフェミニズム——『女の経験』の最深部に」齋藤純一編『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版。

齋藤純一 2003 「親密圏と安全性の政治」齋藤純一編『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版。

盛山和夫 1995 『制度論の構図』創文社。

筒井淳也 2008 『親密性の社会学——縮小する家族のゆくえ』世界思想社。

上野千鶴子 1994 『近代家族の成立と終焉』岩波書店。

山田昌弘 1994 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』新曜社。

矢田部圭介 2005 「親密性と汝指向——シュツの〈形式的概念〉が示唆すること」『ソシオロジスト』7号。

(おけがわ やすし 神戸大学メディア文化研究センター協力研究員)